

ヘブル人への手紙2章1-13節 「人のために来られたイエス」

1A すばらしい救い 1-4

1B ないがしろにする危険 1-3

2B 救いの証し 4

2A 御使いより低くされた方 5-9

1B 万物が任された人間 5-7

2B 苦しみの後の栄光 8-9

3A 兄弟となられた方 10-13

1B 父なる神にふさわしいこと 10

2B 神への賛美 11-13

本文

ヘブル人への手紙2章を開いてください。今日は、1節から13節までを読んでいきたいと思えます。(1章全体を網羅しようと思いましたが、14節以降がとても内容が深いので、次回に回します。)私たちは1章で、御子が御使いよりもすぐれた御名が与えられていることを学びました。主の救いは、それだけすばらしいのです。けれども、ユダヤ人信者たちは、不信者のユダヤ人から受ける迫害や困難によって、ユダヤ教の中に埋没しようとしていました。つまり、イエスをメシアだとは公に告白せず、神殿礼拝や律法を守りながら自分の信仰を私的に持っていればよいと思っていたのでしょう。あからさまに主を否んでいるわけではありませんが、実は否むこととなります。

かつて、遠藤周作原作の「沈黙」が映画化されました。主人公の宣教師が、すでに棄教している先輩の宣教師を助けようとやってきましたが、最後は自分も棄教します。そして、他の宣教師やキリシタンの迫害の急先鋒に立ちます。しかし映画は最後に、彼が死んだ後、彼が主人公が藁で作った小さな十字架を抱えている姿で埋められている映像で終わります。これが、埋没している姿です。心では主をあがめているようですが、信仰を公にしないために、信仰を否定しているのです。ヘブル人への手紙には、信仰からこのような形で離れて行こうとする人々に警鐘を鳴らしている言葉が、何度となく出てきます。

そして、1章では御子の姿、その神としての姿を描いていました。けれども2章からは、その神であられる方が人となられて、苦しみを受けられたことを述べます。神が人となられたことによって、私たちの信仰の対象だけでなく、信仰の目標となってくださったことを教えています。私たちもキリストのゆえに苦しみを受けますが、その後に栄光に入ります。キリストが苦しみを経て、栄光の中に入られたように、私たちも入ります。

1A すばらしい救い 1-4

1B ないがしろにする危険 1-3

¹ こういうわけで、私たちは聞いたことを、ますますしっかりと心に留め、押し流されないようにしなければなりません。² 御使いたちを通して語られたみことばに効力があり、すべての違反と不従順が当然の処罰を受けたのなら、³ こんなにすばらしい救いをないがしろにした場合、私たちはどうして処罰を逃れることができるでしょう。この救いは、初めに主によって語られ、それを聞いた人たちが確かなものとして私たちに示したものです。

午前礼拝でお話したところです。「こういうわけで」と言っていますが、1章でイエス様がいかにすぐれた御名を受け継いでおられるかを見たのだから、自分たちが聞いてきた、救いの福音にしっかりと心を留めて、押し流されないようにするということです。

私が2010年にイスラエル研修旅行に参加した時に、ユダヤ人信者の方と少し交わりました。彼女は日本に訪問したことがあります。「日本人とユダヤ人、同じところがあるかもしれない」とおっしゃっていました。つまり、信者が少ないこと。そして、なぜ少ないかといいますと、イエス様を信じるということが、自分の民族性を失ってしまうのではないかという恐れが出てくるからです。日本人は、信仰を持つと日本人の持つ宗教や文化から離れてしまうので、信仰に至らないというのと同じように、ユダヤ人もイエスを信じると、ユダヤ人でなくなるようにみなすからだということです。

このような、大きな流れに私たちは取り囲まれています。ですから、何もしていないと押し流されて、結局、主を否定するようになっていってしまうのです。そこで、何をしなければいけないのか？「私たちは聞いたことを、ますますしっかりと心に留め」ということです。その聞いたことというのが、3節後半に書いています。「初めに主によって語られ」ました。イエスご自身が福音を宣べ伝えられたことが、福音書に書いてありますね。そして、「それを聞いた人たちが確かなものとして私たちに示したものです」とのことです。使徒たちは、主ご自身から聞いていましたが、この方の復活を目撃して、聖霊のバプテスマを受けてから、確かなものとして示してきました。

著者についてですが、今のここの表現、「それを聞いた人たちが確かなものとして私たちに示した」から、パウロが著者ではないという人々がいます。パウロは、直接、主イエスから聞いたから、ということです。けれども、それは弱い根拠かな？と思います。パウロは、三日目によみがえられたイエス様に直接、聞いていたわけではありません。そして、公生涯にお供していたわけでもありません。パウロが著者であっても、その時代に生きているユダヤ人と共に「私たち」といってもおかしくないと思います。

2B 救いの証し 4

⁴ そのうえ神も、しるしと不思議と様々な力あるわざにより、また、みこころにしたがって聖霊が分け

与えてくださる賜物によって、救いを証ししてくださいました。

使徒たちには、主イエスからの聖霊の力が付与されて、しるしと不思議と様々な力あるわざを行いました。足なえを立ち上がらせました。死んでいた人を生き返らせました。使徒の働き5章には、こう書いてあります。「5:14-16 そして、主を信じる者たちはますます増え、男も女も大勢になった。15 そしてついには、病人を大通りへ運び出し、寝台や寝床の上に寝かせて、ペテロが通りかかる時には、せめてその影だけでも、病人のだれかにかかるようにするほどになった。16 また、エルサレム付近の町々から大勢の人が、病人や、汚れた霊に苦しめられている人々を連れて集まって来た。その人々はみな癒やされた。」

すごいですね。ここで大事なのは、救いを証ししていたということ。つまり、このような著しい現象そのものが大事なのではなく、キリストの救いを証しするために、これらのしるしが伴ったことです。マルコの福音書の最後が、こう書いてあります。「16:20 弟子たちは出て行って、いたるところで福音を宣べ伝えた。主は彼らとともに働き、みことばを、それに伴うしるしをもって、確かなものとされた。」みことばに伴うしるしです。しるしは、みことばを確かにするものであり、それ自体を求めているではありません。確かに救いがあることを、主が御霊によって、私たちの教会にも現して下さることを願います。

2A 御使いより低くされた方 5-9

そして著者は、イエスご自身の働きとして、人と同じようになられた、血肉を取られた話をしていきます。これが、私たちの救いにつながります。

1B 万物が任された人間 5-7

⁶ある箇所、ある人がこう証しています。「人とは何ものなのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とはいったい何ものなのでしょう。あなたがこれを顧みてくださるとは。⁷あなたは、人を御使いより わずかの間低いものとし、これに栄光と誉れの冠をかぶらせ、^{8a} 万物を彼の足の下に置かれました。」

これは詩篇の第8篇からの引用です。8篇には3節に、「あなたの指のわざであるあなたの天あなたが整えられた月や星を見るに」とあります。それでこの言葉が続きます。詩篇の著者ダビデは、夜空を眺めています。こんなに神は大きな方なのに、人はこんなにちっぽけだ、と言っているのです。しかし、主は心に留めておられて、顧みてくださっている。

そして次、7節には、「人を御使いよりわずかの間低いものとし」とあります。これは、御使いが力強く、大きな権威が与えられているのですが、人をそれよりも今は、低い者としていると言っています。これはどういうことなのか？次を読むと分かります。「これに栄光と誉れの冠をかぶらせ、^{8a} 万

物を彼の足の下に置かれました。」ということです。栄光と誉れの冠が人は元々、かぶせられており、万物を彼の足の下に置いていたのです。それだけ大きな栄光と権威が与えられていた、ということです。しかし今は、わずかの間、低いものにされているということです。

これは、いったい何を意味しているのか？ダビデは、創世記 1 章のことを思い巡らしています。「1:26-28 神は仰せられた。「さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう。こうして彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地の上を這うすべてのものを支配するようにしよう。」神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。「生めよ。増えよ。地に満ちよ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地の上を這うすべての生き物を支配せよ。」」人は、そもそも、地にあるすべてのものを支配するために造られていたのです。

しかし、今はそのようになっていません。創世記 3 章を読めば、それは最初の人、アダムが罪を犯し、アダムとその妻エバがエデンの園を追放されたからに他ならず、今は、エバを惑わした蛇、すなわち悪魔が支配しているのです。それで、今の私たちがいます。こんなちっぽけな私たちなのです。しかし、それはいつまでも続くものではありません。いずれ、栄光と誉れの冠がかぶせられて、万物を足の下に置く時が戻ってくるのです。

それが、神の救いのご計画なのです。神はご自分の御子を人として送られ、そしてこの方が被造物にある苦しみを、人の罪を身代わりに受けられて、その死によって私たち人間を贖い出すのです。この方が人となられたことによって、人のうちにご自分のかたちを回復させて、それで神に造られた、元々の姿を取り戻すようにする、というのが、神の救いなのです。

みなさんは、キリスト者として救われましたという言葉をよく使うと思います。では、救いとは何なのか？ということをご自分で考えたでしょうか？冒頭で、押し流されないようにしなさいと警告を受けましたが、世の流れに押し流されている人は、こう考えます。「イエス様、信じるっていったから、天国に行けるしね。」そして世を愛して、世の楽しみにふけるのです。そんな、見たい映画のチケットを事前予約できたみたいな、安価なものではないのです！また、地獄に行かなくて、そんな苦しみを受けなくて済んだ、というものではないのです。そうではなく、神が万物を支配されているように、神と一つになりながら、万物が任されるということなのです。

もしこのことをとても分かりやすくしている小説、映画があります。「ナルニア国物語」です。四人の兄弟姉妹が、最後には、キリストを示しているアスラン、獅子の下で、王座に着き、王冠を受けます。ナルニア国は、これらアダムの子に任されるのです。私たちは、救いというのを、何か楽できる天国に行くことのように考えていないでしょうか？「天国に行ったら一度はおいでよ、酒はうまいし、姉ちゃんはきれいだし！」ではないのです。何かハワイとか、楽天のようなところでゆっくりと過

ごすことを考えているのでしょうか？いいえ、神の国をキリストにあって統べ治める王として、相続するのが救いなのです。だから、聖書には何度も何度も、神の国を相続するという言葉がでてくるのです。それが、最終目的です。

しばしば、ユダヤ教とキリスト教の違いで言われるのは、天の御国は地上に来ると考えるのがユダヤ教で、天の御国に私たちが昇って行くと考えるのがキリスト教だと言われます。この発言自体は間違いです。聖書はどちらも語っています。私たちは、キリストが教会のために来られたら、キリストが天に昇られたように、確かに天に入ります。しかし、キリストが地上に再び来られる時には、共に栄光の姿で戻って来て、そして神の国をキリストと共に統べ治めるのです。そして、この天と地が過ぎ去って、新しい天と新しい地になる時に、永遠に天のエルサレムで王として生きます。

教会というのは、霊的に神の国です。後に主が戻って来られる前に、その祝福の一部を前倒して、祝福を受け取っているところです。ですから、教会において、御霊の賜物が与えられて、それぞれが賜物を用います。そして、そのように奉仕することによって、キリストのかたちが全体として形造られます。これが、醍醐味なのです。そして、後にキリストのものになり、キリストにあって私たちのものになる世界全体にも、私たちはキリストの支配に思いを寄せつつ、見て行くのです。悪い意味の個人主義になってはいけません。つまり、自分さえよければよいのだ、という態度です。キリストの愛に触れたならば、兄弟に関心を寄せます。キリストの愛に触れたならば、教会の外にまで関心を寄せます。たましいが救われてほしい、そしてその人のうちにキリストが回復してほしいと願うのです。これが、救いの始まりであり、良い行いとして救いが現れるのです。

2B 苦しみの後の栄光 8-9

^{8b} 神は、万物を人の下に置かれたとき、彼に従わないものを何も残されませんでした。それなのに、今なお私たちは、すべてのものが人の下に置かれているのを見てはいません。

今、話した通りです。私たちは今、万物が自分の下にあるのを、見ていません。ある程度、自分たちが管理していること、任されていることは、それぞれの場にありますね。でも、すべての物が人の下に置かれているなんていうことはないのです。

⁹ ただ、御使いよりもわずかの間低くされた方、すなわちイエスのことは見えています。イエスは死の苦しみのゆえに、栄光と誉れの冠を受けられました。その死は、神の恵みによって、すべての人のために味わわれたものです。

ここです。「御使いよりもわずかの間低くされた方、すなわちイエスことは見えています。」ということです。御子は、御使いよりもはるかにすぐれた御名が与えられているのに、この方がわずかの間、御使いより低くされました。つまり人となられたのです。このイエスを私たちは見ている、と著者は

言っています。血肉のある人間に、御子がなられたのです。肉体を身にまとわれたのです。

この方を見なさい、この方のことを考えなさいというのが、ヘブル書でのメッセージです。「3:1b 私たちが告白する、使徒であり大祭司であるイエスのことを考えなさい。」「12:2a 信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。」私たちは、罪多き世界に生きています。そして自分自身にも罪が宿っています。理想とは程遠い世界に生きています。その時に、肉体を取られたイエスに目を留めるのです。この方のことを、よく考えるのです。

そして、イエス様は、「死の苦しみのゆえに、栄光と誉れの冠を受けられました。」とあります。そうなのです。死の苦しみを経てから、それで栄光と誉れの冠を受けられたのです。主は十字架の道を歩まれました。それで三日目に神はよみがえらせてくださり、天に引き上げられて、神の右の座に着かれたのです。ヨハネの福音書には、「父のもとにいく」と何度も何度も語られました。十字架につけられるのが目の前に迫った時には、「人の子が栄光を受ける時が来ました。」と言われました(12:23)。この方が、神に造られた私たちに先んじて、栄光と誉れの冠を受けられたのです。そして、この方に連なるようにして、私たちもキリストにあって栄光と誉れの冠を受けるのです。

死の苦しみを経たというのが、極めて大事になります。イエス様が公生涯を始められる時に、バプテスマをヨルダン川で受けられた後、荒野で、四十日間の飲まず食わずでした。そこで、悪魔によって誘惑を受けました。この世のすべての王国とその栄華を見せて、「もしひれ伏して私を拝むなら、これをすべてあなたにあげよう。」と言いました。イエス様は、「下がれ、サタン。『あなたの神である主を礼拝しなさい。主にのみ仕えなさい。』と書いてある。」と言われました(マタイ 4:9,10)。主は、十字架への道を経なければ、これらの王国とその栄華を手にする事はなされなかったのです。苦しみを経て、それで栄光なのです。

ヨセフのことを考えてください。彼は、兄たちに奴隷としてエジプトに売られましたが、その苦しみを経て、エジプトを治める者となりました。同じように、キリストにあって私たちに苦難があるからこそ、栄光の姿に変えられることがロマ 8 章に書かれています。「ロマ 8:17 子どもであるなら、相続人でもあります。私たちはキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているのですから、神の相続人であり、キリストとともに共同相続人なのです。」

そして、「その死は、神の恵みによって、すべての人のために味わわれたものです。」神の恵みによって、私たちは救われました。その恵みには、大きな苦しみの対価があります。イエス様が、死をすべての人のために味わわれたのです。私たちが神の恵みを恵みとして受け取る時に、もしそれが大きな犠牲と対価が支払われて、そうになっているということを忘れる時に、恵みを安物にしてしまいます。何をやってもいいや、となるのです。いいえ、どれほどの犠牲が払われたのかを知られば、恵みを知ると、神の前にただ畏怖の念で、立たざるを得なくなります。

3A 兄弟となられた方 10-13

1B 父なる神にふさわしいこと 10

¹⁰ 多くの子たちを栄光に導くために、彼らの救いの創始者を多くの苦しみを通して完全な者とされたのは、万物の存在の目的であり、また原因でもある神に、ふさわしいことであったのです。

神の子どもたちという時、それは、神に似せて造られた者、神のものを受け継ぐ者として使われています。神によって生まれて、神の子どもとなった者たちは、栄光に導かれます。そこで、神は、彼らに救いを与えられる者として、イエス様を選ばれました。この方が救いをもたらす創始者となったのです。その救いは、栄光ある力ある王として、虐げられているユダヤ人のために支配者を倒す救いではなく、多くの苦しみを通る方にしたのです。もし、御子が神の身分だけで留まっていれば、人でなければ味わわない苦しみは味わわないのです。人であるからこそ知ることでできる弱さがあります。それでイエス様は、人の弱さをまわれしました。そして、父なる神に従順になり、そこで最後まで従順であり、死にまで至りました。その最後まで従順を見て、イエス様は「**完全な者**」になられたのです。

そして、それが、「**万物の存在の目的であり、また原因でもある神に、ふさわしいこと**」とあります。神は創造者であられます。万物の存在の目的、つまり万物は神のために造られました。また原因とありますが、すべては神によって造られました。その万物の中に人がいます。万物の支配者であられる方が、どのようにして罪によって損なわれた被造物と和解できるでしょうか？調和を持つことができるのでしょうか？それは、神であるのに、人となられた方が十字架の死によって、罪を背負われることによって調和させるのです。「**コロ 1:19-20** なぜなら神は、ご自分の満ち満ちたものをすべて御子のうちに宿らせ、その十字架の血によって平和をもたらし、御子によって、御子のために万物を和解させること、すなわち、地にあるものも天にあるものも、御子によって和解させることを良しとしてくださったからです。」

私たちは、世にある苦しみについて、原因探しをしてしまいます。なぜ、こんなことを神は許されるのだろうか？と思います。けれども、それは罪から来ていて、被造物に歪(ひず)みがあるからです。しかし、そこで見てほしいのはイエス様なのです。この方を見れば、その十字架の死を見れば、その原因となる答えが見つからなくとも、心は安心するのです。私たちの魂は、分からないことが起こっていても、原因を知ることではなく、イエスという存在を知ることによって満足します。それは、この方が、十字架の血によって平和をもたらし、和解をもたらしたからです。

2B 神への賛美 11-13

¹¹ 聖とする方も、聖とされる者たちも、みな一人の方から出ています。それゆえ、イエスは彼らを兄弟と呼ぶことを恥とせず、こう言われます。

聖とする方とは、イエス様のことです。そして聖とされるのは、私たちのことです。どちらも一人の方から出ているとは、どういうことか？まず、御子は、父なる神から出た独り子です。そして、私たちも神によってこの世に生まれたものです。すべては父なる神に至るのですから、そういった意味で、イエス様は神の独り子であるのですが、ご自身を私たちの兄弟と呼ぶことをよしとされたのです。イエス様は、よみがえられてから、弟子たちのことを兄弟のように語られました。「ヨハ 20:17 イエスは彼女に言われた。「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないのです。わたしの兄弟たちのところに行って、『わたしは、わたしの父であり、あなたがたの父である方、わたしの神であり、あなたがたの神である方のもとに上る』と伝えなさい。」

私たちは、キリストにあって神の御子が父と持っている関係とそこにある特権を、恵みによって与えられたということです。養子縁組になったのですが、イエス様が長男になられたのです。「ロマ 8:29 神は、あらかじめ知っている人たちを、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたのです。それは、多くの兄弟たちの中で御子が長子となるためです。」長子というのは、分け前が二倍になる存在です。第一の存在です。イエス様が父から与えられているものがありますが、それをこの方を信じる者も、この方にあって与えられているという意味です。

¹²「わたしは、あなたの御名を兄弟たちに語り告げ、会衆の中であなたを賛美しよう。」

これは驚くべきことです。詩篇 22 篇からの言葉ですが、ここはメシアの預言です。「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか。」とあります(1 節)。そして、主がよみがえられて、その後の姿が 22 節以降に書かれているんです。それがこの言葉です。主が、共に私たちとおられて、会衆の中で賛美しておられます。私たちは、イエス様に向かって賛美しているのですが、イエス様は私たちと一緒に、父なる神に賛美してもおられるのです。

そういえば、イエス様は敢えて、父なる神に弟子たちが聞くことができるかたちで賛美しておられたことがあります。「ルカ 10:21-22 ちょうどそのとき、イエスは聖霊によって喜びにあふれて言われた。「天地の主であられる父よ、あなたをほめたたえます。あなたはこれらのことを、知恵ある者や賢い者には隠して、幼子たちに現してくださいました。そうです、父よ、これはみこころにかなったことでした。すべてのことが、わたしの父からわたしに渡されています。子がだれであるかは、父のほかはだれも知りません。また父がだれであるかは、子と、子が父を現そうと心に定めた者のほかは、だれも知りません。」彼はまるで兄であるかのように、弟たちが悪霊を追い出し、喜んでる姿を見て、共に喜んでおられたのです。

¹³また、「わたしはこの方に信頼を置く」と言い、さらに、「見よ。わたしと、神がわたしに下さった子たち」と言われます。

この方に信頼を置く、という言葉はイザヤ書 8 章 17 節からです。そして次は、イザヤ 8 章 19 節です。その箇所を見ると、イザヤ自身が語っているように見えます。イザヤが、自分に与えられた子たちがいて、その子たちがこれからイスラエルのしるしになると告白しているところです。けれども、そのイザヤの預言には、キリストご自身の思いも込められていました。後に来られる方、キリストも、父なる神に信頼し、そしてご自身を信じて来る者たち、その子たちを見よ、と言っていることが反映されていました。

イエス様が人として地上を歩まれていた時に、神に信頼して生きておられました。十字架の死は、神への信頼の賜物でした。本当は、父から離れることは避けたかった。神の御怒りを受けるのは避けたかった。杯を過ぎ去らせてくださいと言われました。けれども、父を信頼して、あなたの願われるようにと祈られました。そしてその後、よみがえられて、ご自身を信じて義と認められる者たちが次々と現れます。その姿を見て、満足されているのです。イザヤの預言 53 章の最後にも、このことが書かれています。「イザ 53:10-11 しかし、彼を砕いて病を負わせることは【主】のみこころであった。彼が自分のいのちを代償のささげ物とするなら、末長く子孫を見ることができ、【主】のみこころは彼によって成し遂げられる。彼は自分のたましいの激しい苦しみのあとを見て、満足する。わたしの正しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を負う。」

次回は、この続きを見ます。イエス様が死なれたことによって、どのようにして罪と死の支配の中にいる者たちが救われたのかを書いている箇所です。激しい霊の戦争であったことが分かります。

- 4A 血肉を持たれた方 14-18
 - 1B 死の恐怖からの解放 14-16
 - 2B 忠実な大祭司 17-18